ハル・ザ・エンデバー

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハル・ザ・エンデバー

【Ｎコード】
Ｎ３５３１Ｒ

【作者名】
ゆう

【あらすじ】
ポケモンの言葉を理解することができるポケモントレーナー、フィルの仲間であるツタージャのハル。そんな彼女があることを成し遂げようと頑張る物語です。

あたしは凄いものを見ている。

カントー地方のマサラタウン。フィルの故郷。
ここにやって来て数日、こんな凄いものを見ることが出来るとは思わなかった。
ジムバッジを八つ集めることの出来たトレーナーのどこが凄いのかはあたしには分からない。でも、そのトレーナーに育てられたポケモンというのが凄いということは分かっている。

数分前までのあたしはこんなことが起きるだなんて想像もつかなかった。
フィルが自分の家の近くにある公園にあたしとリコお姉ちゃんを連れて立ち寄ったら、そこに黒い半袖に白の短パンの少年がいたのが始まりだった。
そいつはどこにでもいそうなフツーの顔をしていた。だけど、自分からジムバッジを八つ所有していることとそれを証明するためにバッジをフィルに見せて、それからそいつはフィルにポケモンバトルしようぜ！　と声をかけた。

それにいいよやろうと言ったフィルは、あたしを出すわけにはいかないとか言って、そしてリコお姉ちゃんに確認をとってから出てもらった。
その後に少年が出してきたのは、ブレイズという名前を与えられたリザードン種のポケモンだった。
フィルからポケモンのタイプの相性のことは聞かされて、もう全

部頭に叩き込んでいるから、これが凄く性質の悪い後出しじゃんけんのように思えて仕方が無かった。

それでもリコお姉ちゃんは負けるつもりなんてない、と言って相手を睨んで身構えた。

フィルは神速で牽制してから自由行動、とリコお姉ちゃんに囁いて、けれどもお姉ちゃんは状況によりますとそれを切り捨てた。当り前だ。

でも、リコお姉ちゃんはフィルが最初に言った通りに神速で瞬時にリザードンのブレイズに近づき、サマーソルトの要領でブレイズの頭部に蹴りを入れた。

「ぐっ！」

「まだ終わりませんよ！」

そこからリコお姉ちゃんは両手の棘を爪に変えて、それから無防備になったブレイズの腹部を切り裂き始める。

でも、ブレイズの反応速度は予想以上に速かった。数回リコお姉ちゃんの爪の攻撃を貰ったけど、ブレイズは羽ばたいて空に逃げていった。反応速度が良いだけじゃなくて、とてもタフな奴なんだ。

「逃がしません！」

「逃げなんかじゃないぞ！」

「これからだ！　ブレイズ、フレイムケージ！」

そしてあたしは凄いものを見ることになった。

少年が指示した技はポケモンが放つことのできる技ではなかった。というかそもそも、そんな技なんてない。

すぐにフレイムケージという技がどんなものかは分かった。火炎放射で相手の逃げ道を塞ぎつつ、けれど火炎を吐きながら相手に接

近して炎の牙による攻撃を仕掛ける。かなり厄介な技だった。
それよりも、あたし以外にポケモンが技を同時に二つ使えるということが信じられなかった。これはブレイズの努力のたまものなのか、それともブレイズの天性の才能なのか。あたしのちょっとしたアイデンティティが崩れかけていたのが分かった。

気がつけば、あたしはフィルの部屋でぼうっとしていた。
ここがフィルの部屋であること、リコお姉ちゃんがブレイズとの勝負に負けてしまったこと、そしてトナお兄ちゃんがこの町に住むオーキド博士のところで研究のために一カ月過ごすことになっていること、最後にフィルが凶暴なビッパたちの攻撃からあたしを庇ってくれたことを思い出して、そしてあたしの中で小さな決意が生まれた。

そうだ。あたしは強くならなきゃいけない。強くなればどんな敵が相手でもへっちゃらになるし、それにフィルに傷を負わせることなんて無くなる。
どこか、そう、あたしの中のどこかはフィルに対して扉を開いていて、それをあたしは認めている。

フィルのことが嫌いだったのは、きっとフィルがあたしとは違うって思っていたからだ。
なんと言えばいいのだろう。あたしはツタージャという種のポケモンで、でもフィルは人類種という生き物だった。

フィルは人類種の中でもイレギュラーな存在であることは分かって、それでもフィルはあたしとは違うって思っていた。
ポケモンと人間は違う生き物だから仲良くやっていくことなんか出来るわけが無い。でも、トナお兄ちゃんとリコお姉ちゃんの姿を見ていくうちに、そんなことは無いのかもしれないって思うようになっていった。
それに、フィルはあたしのことを大切に思ってくれている。だから、左手に大きな傷を負おうと何者かを殺そうとも、あたしのためにそんな行動を起こしてくれる。

いつまでもわけの分からない、つまらない意地を張るのは止めよう。あたしはすこし散らかったフィルの部屋で、そう決意した。

また、その日からあたしの特訓が始まった。
今のあたしが使える技は三つ。蔓の鞭にとぐろを巻く、そしてリーフブレード。
試しに蔓の鞭を使ってみる。体の中に回路をイメージしてからそれに意思を乗せて、脇の下からしゅるりと緑色の鞭を出してみる。回路の消滅をイメージすると、鞭は脇の方へ、つまり体の方へと引っ込んでいく。
次にとぐろを巻いてみる。これも体内で回路をイメージしながら、ぎゅうぅと体をひねっていく。
そろそろかなと思って回路を消滅、元の姿勢に戻って体が引き締まったのを感じる。でも、それは十五秒も過ぎれば萎えて消えてしまった。
でも、蔓の鞭で敵を牽制しながらとぐろを巻くことは出来る。これが技を同時に二つ使うことが出来る、あたしのちょっとした自慢

できる所だった。

あたしはオーキド博士の研究所に預けているトナお兄ちゃんの様子を見てくると言ったフィルに、博士から何か凄い技マシンを、例えばギガインパクトなんて借りてきてと言った。

フィルは二つ返事で快諾して、リコお姉ちゃんを連れて外に行ってしまった。

フィルの家は二階建てで、二階にフィルの部屋がある。

一階には誰もいない。フィルの両親は共働きをしていて、つまりあたしは留守番を任せられたことになる。

一階にある家具や部屋の位置を把握するために色々歩きまわりながら、あたしは傑作なアイデアを浮かべていた。

前にリザードンのブレイズがやった、技を二つ同時に使う行動。あれならあたしだってできる。

それより、フレイムケージなんてものより凄いものを考えついた。あたしオリジナルの技「ギガブレード」だ。

ギガインパクトという技はノーマルタイプ最強の物理技と言われているみたい。体当たりとかと同じように使えるはずだから、それの効果を尻尾に集中して、それにリーフブレードを重ねていく。

ギガインパクトのもの凄い威力にリーフブレードの鋭さが重なる。これを使うことが出来れば、誰だって倒すことが出来る。そう思わずにはいられなくなった。

その日の昼、フィルとリコお姉ちゃんはちゃんとお土産を持って帰ってきた。技マシンナンバー６８、ギガインパクトと技マシン再

生する機械だ。
　あたしは早速それを使わせてとフィルにねだり、誰も使っていないという二階の部屋を貸し切ってそこに籠ることにした。
　その部屋は家具は何も置いてなくって、少し大きな窓があるだけだった。
　それからあたしは機械から伸び出ている吸盤のようなものを体につけられて、技マシンの円盤を起動すれば技を覚えることが出来るんだとフィルは説明しながら、紙きれのような何かを注意深く見ながら機械の操作をしていた。
　あたしは、きっと技マシンの起動は体の中に回路を構築するためのヒントを与えることなんだと解釈して、その感覚がやってくるのを楽しみにしていた。
「楽しそうだね、ハル」
「だって、あたしには凄い計画があるんだから」
「どういうものなの？　教えてよ」
「凄い技を使えるようになるために頑張るの。フィルに傷をつける奴がいなくなるようにね」
「……そっか。うん、ありがとう」
　フィルはそう言ってあたしの頭を撫でて、それから機械のスイッチを押した。
　その瞬間、勝手に体の中に回路がもの凄い勢いで構築されていく感覚が走って――でも、その回路の全体図が掴めない。
　つまり、ギガインパクトの回路はあたしには全く把握できないものだったことを意味していた。
「どう、使えるような気はした？」
　しばらくして、フィルはあたしにそう呼びかけてきた。
　あたしは首を横に振って、それからフィルを見上げて口を開く。

「でも、トナお兄ちゃんが戻ってくるまでになら覚えられそう」
適当な言葉だった。正直な話、あの回路はあたしじゃ理解できそうもない。だけど、時間をかけてみれば――出来るかも。
「そう？　そうなると一カ月くらいになるけど……ちょっと待って、オーキド博士に連絡してみるよ」
フィルはそう言って部屋を出て、ちょっと時間が開いてから部屋に戻ってきた。
フィルが言うには、オーキド博士は貸し与えた技マシン一式をトナお兄ちゃんを返すまで貸してあげると言ったという。
元々、オーキド博士が特殊能力を持つトナお兄ちゃんの体を検査したいと言いだしたのが始まりで、フィルはその見返りにトナお兄ちゃんに十万ボルトの技マシンを使うように言って、そしてあたしのリクエストで変わらずの石を一つ貰うことになっていた。
でも、オーキド博士としてはそれでは釣り合わないと思ったらしく、あたしにギガインパクトを覚えさせようとしたフィルの行動を認めてくれたことを、フィルはかいつまんで説明してくれた。

それからあたしは誰もいない部屋で延々と技マシンナンバー６８と格闘していた。
何度も技マシンから回路を読み取ろうとして、けれどもそれを把握することは出来ない。
半端に分かった回路を組み合わせてそれに意思を乗せてみても、技は出てきてくれない。
最初の一週間はイラつくことは無かった。頑張れば、努力すればギガインパクトを覚えることが出来る――根拠のない自信があたしを支えてくれていた。
でも、もう駄目だ。あたしにはこれの回路を理解することは出来

ない。進化する道をとればギガインパクトなんて一発で覚えられるのだろうけど、でもあたしはその道をとりたくない。
あたしはツタージャだ。進化をするとジャノビー、ジャローダとその姿と能力を変えていく。
フィルにジャローダの絵を見せてもらったことがある。グラス、という題のそれを見たあたしは驚いた。二度進化をすれば、このような恐ろしい姿になってしまうことを知ったから。

フィルはあたしにオーキド博士から貰ったよ、と変わらずの石の首飾りを身につけさせてくれた。その時ほどほっとした感覚は今までに無かったし、今も手にとってそれを見つめているとどこか安心できる気がする。

その石にまつわる話を一つ知っている。リコお姉ちゃんがあたしに話してくれたことだ。
お姉ちゃんは力は欲しい、でも進化はしたくないという葛藤に苦しんでいた。今のあたしと殆ど状況は似ている。

あたしは……進化をしないで、ギガブレードを編み出す為にギガインパクトを習得することに決めた。考えてみたら、ジャローダにまで進化して、あんな巨大な体になってしまえばあたしはフィルと一緒にいることが難しくなってしまう。それ故にモンスターボールから出たり入ったりしたら、その分ラグが生まれてもしもの時にフィルを守れなくなる。
だからあたしは、ギガブレードを編み出すのにはこのツタージャの姿のままでいなければならない。残された時間は、あと二週間。

あっという間に二週間が過ぎた。でも、その割には長い時間をかけてギガインパクトを覚えたような気がする。
頭から血が出るんじゃないかと思うくらいにそれの回路を感じて、それを体に焼き付ける作業はどうにか無事に終わった。
そう、あたしはツタージャでありながらギガインパクトを放つことが出来る、フィル曰くあまりいないポケモンになることが出来た。

これはあたしの努力だ。でも、フィルやフィルの両親、そしてリコお姉ちゃんの協力もあってこれは実現できた。
フィルの両親はあたしに部屋の中で集中出来るような環境作りをしてくれたし、リコお姉ちゃんは回路構築のコツを何度も一から教えてくれた。
それになんといっても、あのシンオウ地方コトブキシティにあるセントラルというとても大きなポケモンセンターの食堂で出会った「野菜サラダ」を、フィルは頑張って作ってくれたのも大きい。
ちょっと味は違う気がしたけど、リコお姉ちゃんの話では料理は苦手だったはずのフィルがあたしのために野菜サラダを作ってくれたのが嬉しかったし、ギガインパクトを覚えようとするやる気を出してくれた。

ギガインパクトの回路を体に焼き付けることが出来たのは、フィルとリコお姉ちゃんがトナお兄ちゃんを迎えに行くギリギリの時だった。
この時に技マシンを返さなければならないから、本当にギリギリのタイミングだった。

あたしはトナお兄ちゃんが帰ってくる記念にギガブレードを披露することを決めて、それをフィルに伝えていた。
ギガブレードってなんか凄そうだねとフィルは笑って、リコお姉ちゃんも笑ってくれた。

田舎町ということもあって、車の通りがあまり無い道を歩いてどのくらい経ったかは分からないけど、ようやくオーキド博士の研究所が見えてきた。
思っていたより大きな建物で、フィルは立派な玄関の前にあたしとリコお姉ちゃんを残して中に入っていった。
「ねぇハル」
「なに？」
「本当にギガインパクトを覚えちゃったんですか？」
「うん！　だって、フィルを守るのにトナお兄ちゃんとリコお姉ちゃんだけじゃ荷が重いでしょ？」
「確かに、もっと戦力があればって思ったことはありますよ。でも、そこまでやらなくていいんじゃ……」
「ううん。もっとあたし、強くならなきゃ。フィルが傷つくのも嫌だけど、トナお兄ちゃんとリコお姉ちゃんが傷つくのも嫌だもん」
その言葉にリコお姉ちゃんははっとしたような顔をした。どうしたの？　と声をかけると、少し震えた声が返ってきた。
「ありがとう。そうだ、二つお願いがあります」
「なに？」
「一つは絶対に無茶をしないことです。ポケモンバトルでも、他の

戦いでも。ハルが傷ついても皆が悲しみますから」
「うん。分かった」
「それと、これは私とトナからのお願いです。私たちを呼ぶ時は呼び捨てで良いです。というより、呼び捨てて下さい」
「う、うぇ？　うん、分かった……」
なんか違和感がある。だって今まで呼び捨てて呼んだことが無いのに、いきなり呼び捨てろって言われても……でも、そうしよう。
「分かったよ、リコ！」

それからしばらくして、フィルはトナと一緒に研究所から出てきた。
トナは酷く退屈していたこと、そして何度もシリエジオを繰り出したせいで体が疲れたこと、回復してもすぐに実験続きで参ってしまったことを話して、フィルが帰ったら電話で文句を言ってやる、と少しだけ怒っていた。
「でもな、ちゃんとリターンはあるぜ」
「リターン？　何か得した事でもあるの？」
「十万ボルトを覚えただろ？　あれでシリエジオみたいに体を強くできるようになった。エナジーボールでも出来るようになったぜ」
本当に！？　とフィルとリコが驚いている。トナのシリエジオとはどういうものなのかが分からないから、あたしはそれを見てみたいとねだった。
「無理無理。しばらく休ませてくれよ」
「しばらくってどれくらい？　一日？　二日？　三日？」
「俺が全快したっ！　って言うまで」
えぇー、と文句を言ってやる。でも、あたしはトナが本当に疲れているのだということが分かって、フィルの家に帰ったらギガブレードを披露して元気づけることを決めた。

フィルの家から研究所にやってくるまでと同じ時間をかけて、あたしたちはフィルの家に戻ってきた。
この時にフィルが、そういえばハルが何か披露してくれるんだよって言いだして、あたしはフィルの家の裏庭でギガブレードを披露することを言って、皆に集まってもらうことにした。

フィルの家から手入れの行きとどいた裏庭に出て、足に心地よい雑草の感覚を覚えながら精神を集中させる。
一か月もかけて体に叩き込んだギガインパクトの回路を構築、そこに意思を乗せていく。
回路はあまりにも大きすぎて、それでもどうにか把握しながら、尻尾の方にリーフブレードの回路を構築、意思を乗せて――
「ギガ、ブレードッ！」
あたしはそこから前宙して、それから地面に向けてギガインパクトの力を尻尾に集中し、そこにリーフブレードの力も乗せた一撃を叩きこむ！

大げさに地面が陥没したのが分かって、後ろにいる皆が驚きの声を上げるのが分かった。
でも、その声は何だか小さくて――あれ？　なんか、駄目だ。かなり空を高く飛んで、それでもうまく着地したはずなのに、力が入らない――

（後書き）

どうも、「ハル・ザ・エンデバー」の作者のゆうです。

変な所で切れてるなぁと思われるのを承知で、敢えて変な所で切っています。この後の展開を読者さんに想像してもらいたかったので、こうしてみました。

さて、ゲーム「ポケットモンスター　ブラック・ホワイト」にてツタージャはギガインパクトを覚えられません。
しかしこの短編は、ツタージャであるハルがギガインパクトを覚えてハルのオリジナル技「ギガブレードを」編み出そうとして努力をした、というお話になります。こういうのが嫌いな方（僕もそうなのですが）には嫌悪感ダレダレな短編になったと思います。本当に申し訳ありません。

この短編を書くにあたって「アムネシア」や「シリエジオ」、そして「パンドラ」では避けて通ってきた「技マシン」の解釈をせざるをえませんでした。
ゲーム中では技マシンはディスクの形をしています。まさかこれをポケモンにくわえさせて技を覚えさせるわけでは無いだろう、何らかの技マシン再生機械があって、別の器具をポケモンに使わせるのだと解釈をしたのですが……

技マシンで技を覚えるとは一体どういうことなのか？　ということについて自分で勝手に解釈していって、ポケモンが技を使う時には「回路」を構築するという設定を新たに付与させてみました。
そう、技マシンで技を覚えさせるということは、覚えさせるポケモンにその技の「回路」を覚えさせることと同義にして見たのです。

だからジャローダに進化してあらゆる能力を向上させなければ、ツタージャはギガインパクトを覚えることは出来ない。これが勝手に解釈した「ポケモンの技と技マシンについて」の一つの回答となります。

本作品「ハル・ザ・エンデバー」を読んで頂き、また、ここまで読んで頂けたら、とても嬉しく思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3531r/

ハル・ザ・エンデバー

2011年5月19日19時46分発行